

「敗北」を抱きしめて

——後藤竜二「故郷」の「風景」——

藤田のぼる

1

一九七九年に『故郷』が出版された時、あるいは『日本児童文学』への連載が開始された時、少なからぬ後藤竜二の読者はとまどったに違いない。デビュー作『天使で大地はいっぱいだ』などに比べて、対象年齢の違いはあったとしても、その文体の落差はあまりに大きいものだった。

「サブちゃん！」

と、キリコの声がした。ぼくのまわりで、クラスのやつらがげたげたわらった。(略)

「あなたの番です。」

顔をあげたら、キリコがぼくを見つめてわらってた。

(中略)

「おうちは農家なのね。」

キリコは、教卓の上のえんま帳を見ながらいった。

「はい。」

と、ぼくはこたえた。

「おうちでは、いま、どんなことをしてるのかしら。」

「ビニールハウスをたてて、熱線を入れた温床でレタスや、ナスや、メロンや、トマトなんかの苗を育ててます。」

「まあ。」

と、キリコはぼくの顔をじろじろながめた。(略)

「そんなにたくさんのこと、すらすらいえるほど、お仕事のことが知ってるなんて、やはりおうちでは、よほどおてつだいしてるのよ、えらいわ。」

主人公の三郎の、六年生になった最初の日、新しい担任のキリコとの出会いの場面である。これに対して、『故郷』の第一話「とうきびの季節」は次のように語られる。

とうきび畑は丘の斜面全体をおおっていた。

そのまま原生林のおくふかくにまでつづいているように見えるとうきび畑とむきあうと、ぼくはいつでも胸が